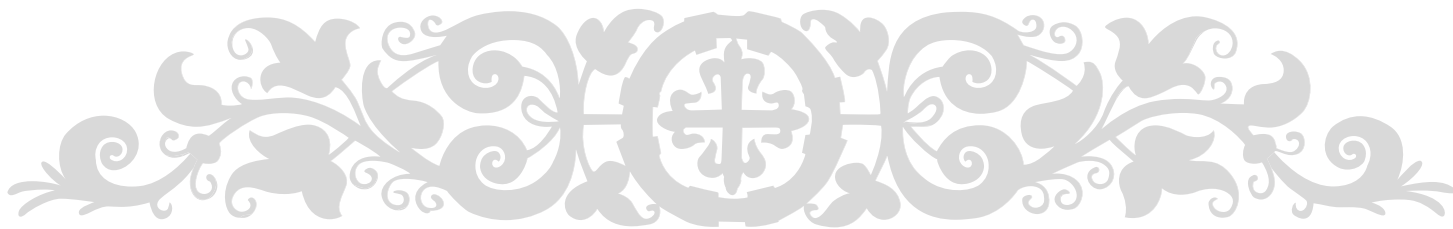


# サイエントロジーの 宗教的性質

ジェフリー・パリンダー博士  
比較宗教学教授  
ロンドン大学  
イギリス  
1977年





# サイエントロジーの 宗教的性質

ジェフリー・パリンダー博士  
比較宗教学教授  
ロンドン大学  
イギリス



# 目次

I.	はじめに	1
II.	サイエントロジーの信条における神の位置	2
III.	儀式とその意味	3
IV.	サイエントロジーの信条の宗教的性質	4
V.	結論	4



# サイエントロジーの 宗教的性質

ジェフリー・パリンダー博士  
比較宗教学教授  
ロンドン大学  
イギリス  
1977年

## I. はじめに

私は、自分がサイエントロジストではないことを明確にしなければなりません。それどころか、私は40年<sup>1</sup>以上にわたって、メソジスト派の聖職者として任命されています。サイエントロジーの信条と実践を支持する訳ではなく、そのいくつかに対しては批判的であるかもしれません。しかし、宗教の自由には関心があり、それは民主主義社会に不可欠なものです。

1971年にサイエントロジーの代表者から私にアプローチがありました。というのも、宗教の意味に対する私の関心事は、私の著作や、ロンドン大学で比較宗教学の教授としての地位によって知られていたからです。私は、直接情報を得るのが良いと考え、自分に送られた文献を調べたり、この運動組織の代表者に会ったり、イギリスの本部を訪れたりしようと思いました。

イーストグリンステッドにあるセントヒル荘は、十分だけれども、それほど広大ではない敷地にある、古い大きな建物です。私の訪問は準備されていましたが、いつものように私は30分早く着き、しばらく自分で歩き回ることができました。サイエントロジストについての噂から、私は門番や、番犬さえいるのだらうと半分思っていました。すべてが開放されていて、誰にも気付かれないまま車で駐車場に

1. パリンダー教授は1977年にこの論文を書きました。

入りました。それから私は生徒が勉強している建物に入り、教室が開放されているのを見て、最後に非国教派教会の建物のようなチャペルに入りました。

ロン・ハーバードの写真が多くの場所にあり、壁の上には、ほとんど彼がいるかのように、「急がないで。ロンにぶつかるかもしれません」といった文章が壁に掲げられていました。聖歌隊がチャペルに入ってきた時、ある印象的な言葉が行進賛歌にありました。「この人だけが、道を知らしめた。」宗教的教条主義の聲が響きます。仏陀のように、ロン・ハーバードには超自然的な権威が賦与され、理論上ではなくても機能上では神になることさえあるのかもしれませんが。この傾向に相反する他の信条条項がありますが、日曜午後の礼拝は、あらゆる年齢の人々で混んでおり、彼らは朗らかで、良く反応していました。ジャスティス・アッシュワース氏は、「聖職者は人々に向かい合い、彼らに挨拶をする」と記しましたが、これはさまざまな宗派の教会に共通しています。聖職者は、聖職者用の襟と十字架かアंक十字のようなものを着けていましたが、これらは宗教の装飾であり、その実体ではありません。賛美歌、祈りのある静寂の時間、そして神のことに数回言及した説教がありました。

## II. サイエントロジーの信条における神の位置

サイエントロジーの信条における神の位置は、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教のように支配的ではないように見えますが、明らかに存在しています。サイエントロジー宗教の本には、教義と実践に関する章が、その使命を「個人が、自分自身が不滅の存在であることに気づき、自身と、他人および至高の存在との関係について基本的な真実を達成、獲得するのを助けること」とであると定義しています。ここで、そして通常の礼拝の形式で、「私たちは、彼が神をしっかり認識できるほど良くなるために彼の罪を消去したい」、そして「人間の持つ最も良い神の証拠は、彼が自分自身の内部に見つける神である」と述べられます。内なる神と輪廻転生についての教えは、サイエントロジーを東洋式あるいはインド式の宗教的思想と結び付けていることがわかります。ですからそれは、「他の生命形態、物質宇宙、そして究極的には至高の存在との調和の中にある個人の救済」という目的と、「サイエントロジーの背景を見出すのは、東洋の伝統の中である」ことを述べています。

神は第8のダイナミック、人が第7のダイナミック、つまり精神的宇宙が「完全に達成」された時に到達する最高レベルの現実性として説明されます。神と精神的宇宙はまた、「セータ宇宙として分類」され、そしてセータやセイタンは「精神」と、「その人自身」として表現されます。人は精神的な存在であるという不変の主張と、人間の起源の物質主義的説明の拒絶があります。人は不滅であり、無数の人生を生き、神にまで上昇することができると述べられます。これは確かに、いくつかのインドの宗教の信条と似ており、サイエントロジーは宗教であるという主張において重要です。



### III. 儀式とその意味

結婚式は一般に宗教的として考えられ、教会で行われるものかもしれませんが、本来は宗教的ではありません。それは、同意したふたりの関係者間の、ふたりの証人の前での非宗教的な契約です。後に教会の祝福がしばしば伴いましたが、初期の教会はこれを理解し、何世紀もの間、国家の慣習に従いました。唯一、トレント宗教改革後会議が、キリスト教の結婚は教会で、司祭によって執り行われなければならないと法令で定めました。改宗者に、教会での結婚を強いる現代のプロテスタントと宣教師は、トレントの法令に従っているのです。結婚が秘跡として保たれているとしても、司祭と教会は、キリスト教神学において結婚の正当性に不可欠なものではありません。秘跡の執行者は、互いに誓約を執り行う夫と妻であり、これはどこでも宗教的に行われても良いものです。

多くの国々に存在するキリスト教伝統が、結婚式が世俗の権威や登録官、行政長官、市長により執り行われることを依然として求めています。確立された教会があるところでさえ、結婚は他のチャペルで行われたり、登録官によって行われます。したがって、サイエントロジーの結婚式に宗教的信仰と実践の証拠を探し求めるべきではありません。

最も重要なふたつの礼拝は、洗礼または子供の命名と、死者の埋葬式です。ふたつに関連した信条は、私たちの本性や歴史に深く入り込み、人類の最も一般的な秘跡を形作ります。サイエントロジーは、「セイタン」の存在を信じています。不滅の魂を表す独自の言葉で、ギリシャ語のアルファベット第8の文字「セータ」から派生しており、恐らくその象徴的な楕円の形を考慮しているのでしょう。礼拝ではこのように述べられます。「命名式の主な目的はセイタンが方向付けられるのを助けることです。彼は最近、自分の新しい身体を手に入れました」と。セイタンは自分の身体、自分の両親、名付け親に引き合わされたのです。明らかにここには精神的で、物質主義的ではない儀式があります。

同様に、サイエントロジーの葬儀も精神的主張を行います。魂は、未来の人生へと助けを受け続けることができます。「さあ行きなさい。親愛なる (故人) よ。より幸福な時間と場所で、もう一度生きなさい。」死を超えて生き続けるという、人間のある種の精神的な特性への信仰は、恐らく最も古く、最も普遍的な人類の宗教的信仰なのでしょう。死後の人生に対する何らかの形の信仰を持たない部族や民族は、恐らく存在しておらず、そのような信仰の存在がまさに宗教の明確な表れとなっています。

古代エジプト人 (現代人のイスラム教徒ではない) は、魂と神の存在を信じて信心深く、少なくとも西洋の感覚では、厳密にはそのどちらをも信じていないと言えるかもしれない仏教徒も、信

心深いのです。しかし両方とも宗教儀式を持っており、サイエントロジーは意図的にそれらに近いものを持っています。

## IV. サイエントロジーの信条の宗教的性質

サイエントロジーを非宗教的な組織と比較すれば、たとえそれがまだ複雑な神学を発展させていないとしても、その信仰のいくつかの宗教的性質は明確になります。それは不滅の魂に対して、なんら特定の興味を持っていない政治的団体とは全く異なります。同様にそれはオッドフェローやアングロ・サクソン忠実連合団体のような社交クラブとも異なります。それは創造主である神、そして精神的存在への信仰を持つフリーメーソンの主義により近いものです。しかし、フリーメーソンはしばしば、その組織は宗教ではないと言われていました。多くのヨーロッパ諸国では少なくとも最近まで、フリーメーソンの主義は、強く反教権主義的で、一種の反宗教的なものでした。しかし、イギリスと合衆国においてフリーメーソンは、しばしば国教会のメンバーでもあり、ライバルの宗教よりもむしろ道徳律に従うことと真の支援を示すことを望んでいました。

さらに、古代と現代の宗教運動へと手短かに言及してもよいでしょう。インドのジャイナ教徒は、多くの魂を信じていますが、神は信じていません。それでも彼らは宗教と見なされます。理論と実践には違いがあるとはいえ、仏教徒は至高の神や描写可能な魂を信じていません。しかし、彼らは主要で世界的な布教宗教のひとつです。ヴェーダーンタ学派の多くのヒンドゥー教思想家は、二元論者ではなく、個人の魂は普遍的な魂であるから、人間と神はひとつだと信じています。これは、キリスト教や西洋の法的な感覚においては神ではありませんが、それでもヒンドゥー教は主要な宗教です。現在インドの新ヴェーダーンタ学派は、ヨーロッパとアメリカで広い影響を与えています。というのも、その教えが大部分の西洋宗教の厳格な教義とも、多くの現代科学の物質主義とも異なっているからです。

サイエントロジーは当初から、基本的な教義として、生命に対する精神的な態度を採用してきたように思われます。創設者とその目的は、「人を細胞、脳、身体の状態にまで陥らせようとする」束縛、つまり「人に甚だしい損害を引き起こし、もし正されなければ最終的には絶滅へと至ってしまう『科学的な』嘘」から、人を自由にするということであると宣言しています。

そして再び「人間は本来精神であり、不滅であり、基本的に破壊できないのである」と。

## V. 結論

サイエントロジー宗教における教義と実践に関する陳述は、その精神性の簡潔な肯定から始まり、直ちに続けて、その運動の背景をヒンドゥー教、仏教に関する特別な節と一緒に考えるとこ

を受けており、そして、ここで彼らは現代思想として普及している傾向を反映させています。一世紀以上の間、アジア、特にインドの思想の影響はヨーロッパとアメリカで強大であり、これは宗教の理解に影響を及ぼすに違いありません。宗教は人間の精神的な性質、そしてそれが神であれ、絶対者であれ、仏陀であれ、その崇拝の対象と関係しています。サイエントロジーが発展するに従って、それは目的としてだけでなく、あらゆる人間の努力の源、持続する力としての至高の存在の在りかを、より強調するようになったのかもしれませんが。実際には、人間の精神性と、人間の破壊不可能な内面的実体の教えは、世界の主要ないくつかの宗教と多くが一致しています。

ジェフリー・パリンダー

1977年



## ジェフリー・パリンダー

ジェフリー・パリンダーが「サイエントロジーの宗教的性質」を書いた時、彼はロンドン大学の比較宗教学の教授でした。彼は現在、比較宗教学の名誉教授です。彼はまたロンドン大学キングスカレッジの特別会員であり、60年間メソジスト派の聖職者でもあります。彼は40以上の世界の宗教に関する本の著者であり、それらは12カ国語に翻訳されています。彼は世界の宗教に関する百科事典や辞書を編集しています。

